

川柳にみる江戸時代後期の動物表現に関する研究

安田容子

(東北大学大学院環境科学研究科 東アジア歴史論)

yasud@cneas.tohoku.ac.jp

Study about representation of Animals in the late Edo-era

Yoko YASUDA

Key words: Senryu, animal depiction, knowledge toward animals

江戸時代後期における人と動物との関わりは現代とは異なっている。当時の人々が動物に対してどのようなイメージを持っていたのかということの問題とし、当時の動物表現に注目した。川柳は、江戸時代後期に柄井川柳により確立された、17文字で表現された定型詩である。日常の風俗やよく知られた伝説など様々な事柄が題材として詠み込まれており、当時の風俗や人々の意識について知るための資料として適切である。『はいふうやなぎたる誹風柳多留』は明和2年[1765]から天保11年[1840]まで167編170冊が刊行された川柳の選句集であり、約十万句が乗せられている。動物（陸上のほ乳類）について詠んだ句は、約五千句あり、32種類が詠まれている。ネコやイヌなど身近な動物が多く詠まれているが、ゾウやトラなど外国の動物も詠まれている。

動物表現のある川柳は、言葉遊びや謎かけに重点を置いた狂句を打ち出した四世川柳の時期（文政7年[1824]～天保8年[1837]）に多く制作されている。さらに、この時期には、動物を擬人化することでその特徴や行動を面白く詠んだ句も数多く制作され、多くの動物が擬人化されている。動物を詠み込んだ川柳の表現は以下の4つに分類することが出来た。

- ①動物の特徴や行動の面白さについての表現
- ②人と動物との関わりについての表現
- ③人や物を動物にたとえる表現
- ④ことわざや縁語など言葉遊び

このうち、①の動物の特徴や行動を表現した句には、動物の実際の特徴を面白く表現したものと、俗信などにもとづいた特徴についての表現がある。また、②の人と動物の関わりを表現した句においても、当時の日常で起きていた人と動物との直接的な関わりについての表現と、想像による観念的な関わりについての表現がある。特に、あまり目にすることのない動物や、狐や狸などの特定の動物に対しては、このような俗信に基づいた知識や観念的な関わりでの表現が多い。動物に対するイメージは、動物との直接的な関わりだけでなく、俗信などにもとづいた知識もあわせることで形成されていったと考えられる。